

近江の古瓦 V 湖南 1

守山市と野洲・栗太・甲賀3郡の地域を湖南地方の1とし、その地域内出土の古瓦について概要を述べることにします。

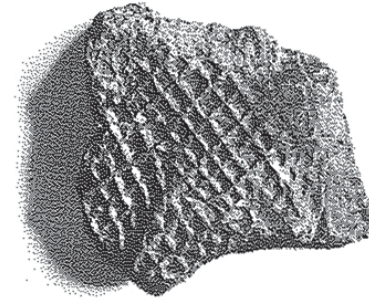
野洲郡の古瓦

野洲町では小篠原福林寺跡と永原で古瓦が発見されています。福林寺跡は野洲中学校の付近にある遺跡です。福林寺については京都の東寺関係の文書の中にその名があり、天武天皇の御代に石城村主宿禰が建立したという寺伝が述べられています。ここから出る古瓦は軒丸瓦が2種、軒平瓦が4種あります。まず軒丸瓦について述べましょう。その一は複弁8葉と思われるもので、外縁に重圈文が認められます。外縁の一部と、それに続く複弁2葉分の頭部だけが残っている破片ですから、その詳細を述べることはできませんが、外縁に重圈文のある複弁系の瓦は、滋賀県では例が少ないようです。次に単弁8葉のもので外縁部が無い珍しい軒丸瓦があります。中房の蓮子は1+8で、弁は輪郭線で作られ、中に比較的大きな子葉があります。軒平瓦ではまず3重弧のものがありますが、この平瓦部凸面のたたき文様は縄目のようです。次に均正忍冬唐草文の軒平瓦があります。滋賀県におけるこの種のものでは、後述の栗東町樋口瓦窯のものが比較的整っていますが、この福林寺跡のものは、守山市益須寺跡出土のものと共に文様がだいたい崩れているようです。これの平瓦部凸面のたたき文様は、格子目たたきと縄目たたきの両方が入りまじっています。更に、写真で示したような、他にほとんど例を見ない文様のものが2種類あります。この中の一つの瓦には、その右端に錨のような文

様がありますが、このようなものは京都の大宅廃寺出土の鬼瓦に見られますので、あるいはこれの崩れたものかもしれません。

野洲町永原でも古い瓦が出土しています。軒丸瓦は中房の表面がすっかり剥落し、外区も欠失している単弁16葉のもので、軒平瓦は重弧文の破片ですが、これは弧の断面がコ

永原廃寺出土平瓦



の字状をなすものです。なお、ここでは平瓦の破片も少量出土していますが、このたたき文様は格子目のも

のがほとんどで、縄目たたきは1片だけです。これらの瓦が示す時期は、出土量も少なく、欠落部分も多いので、確言はできませんが、奈良時代より降らないとしておきましょう。

中主町では六条にちょっと変わった瓦の出土する遺跡があります。この瓦は寺院遺構に伴うものでなく、瓦溜りのような状態で出土しており、したがってこの瓦を使った寺院の遺跡はわかりません。瓦は軒丸瓦が2種類と、これと同じ文様を主文とした鬼瓦片、それに軒平瓦が1種類です。軒丸瓦は大小の2種類で、瓦当文様の大要は同じですが、細部ではやや相違が見られます。大形のものを見ますと、8葉の弁のうち、一つおきの4葉は輪郭



六条兵主麿寺出土鬼瓦

線の弁の中に3本の線を入れたもので、残りの4葉のうち1葉は普通見られるような子葉を入れますが、他の3葉は弁の中にまた輪郭で囲まれた弁様のものを入れてあります。したがってこの瓦は単弁8葉とすべきか重弁8葉とすべきか迷うところです。蓮子は1+6+6と思われます。この内区を1条の円圈が囲み、その外側にやや幅の広い円圈がめぐっていますが、この上面に間隔のあらい珠文がのっています。立上がった外縁の内側には鋸歯文があります。小形のもの、蓮子が1+5で、弁はすべて3本線を入れたものです。外区の円圈上の珠文は大形のものとは異なり密に施されています。



六条兵主麿寺出土軒平瓦拓本

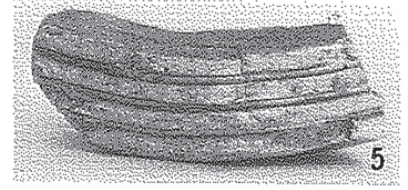
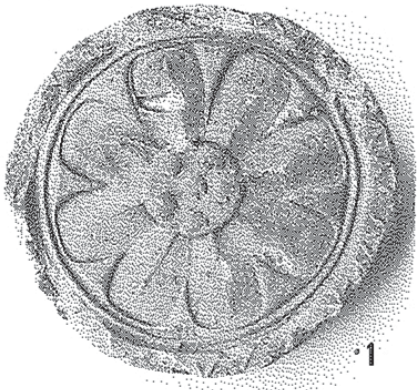
軒平瓦は藤原宮式と呼ばれる偏行唐草文のものですが、外区の文様が普通の藤原宮式のものとは違ってあります。すなわち、上外区はつくられています、その中には文様がありません。下外区は鋸歯文というよりは波文と言った方が適当なものです。両脇区は作られていません。このように非常に特殊な瓦です。このようなものは現在のところ他に例を見ないようです。

守山市の古瓦

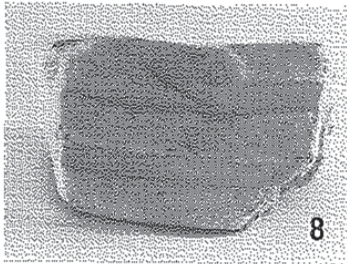
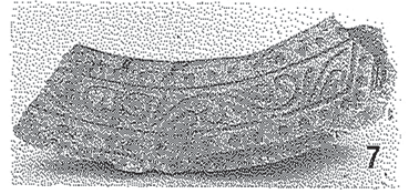
守山市では日本書紀の持統天皇紀に記載されている益須寺の遺跡で4種類の軒丸瓦と3

種類の軒平瓦が発見されています。益須寺は東海道本線の守山駅と野洲川の間あたりにある寺院跡がその遺跡地と考えられているようです。まず、益須寺の瓦としてよく知られているのが素弁8葉の瓦です。これは蓮子は1+5で、弁の先端は方形に近く、中央に太い稜線があります。外縁には鋸歯文が施されています。これと対をなすと思われる軒平瓦は四重弧文のものです。この一対は白鳳時代に属する瓦と思われます。次に複弁8葉の軒丸瓦で、中房が大きく、蓮子は正しく同心円に並んでいませんが1+7+11と思われ、弁中の2個の子葉の間を隔てる線の無いものがあります。このような子葉の複弁8葉のものは法隆寺の瓦に見られるので法隆寺式とよばれています。ただし益須寺のものは法隆寺のものとは比較して細部の相違が見られます。この弁も前述の素弁のものに似て先端が方形に近い形をしています。外縁には鋸歯文が見られます。これと対をなす軒平瓦は、やはり法隆寺式の均正忍冬唐草文のものですが、福林寺跡の出土瓦で述べたように、その文様はだいたい崩れています。しかし、滋賀県下で法隆寺式の軒丸・軒平が対になるのはここだけで、野洲町の福林寺と栗東町の樋口瓦窯では軒平瓦だけが、大津市瀬田の東光寺と彦根市の普光寺では軒丸瓦だけが見られ、対になっておりません。この一対の軒先瓦の時期は前述の素弁8葉につづくものでしょう。それに対し、奈良時代の後半に属すると思われるものに、単弁16葉で外区に珠文帯をもつ軒丸瓦と均正唐草文の軒平瓦があります。この軒平瓦は、瓦当の文様は同じですが顎の部分がやや異なる2形式があるようです。なお、ただ1片ですが、既述のものとは趣の異なる軒丸瓦の小破片が出ております。破片が小さいので、瓦当文様や時期については推定をひかえたいと思います。

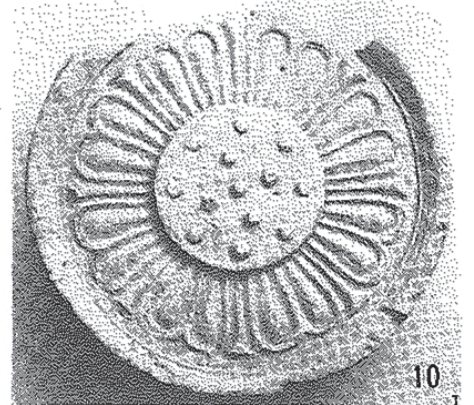
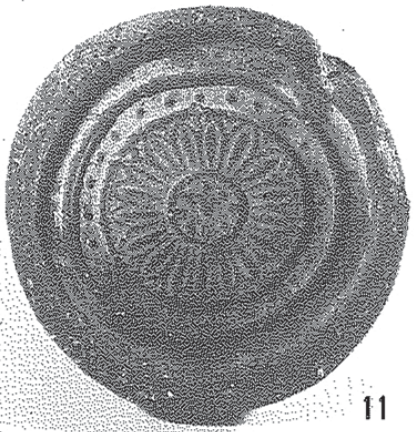
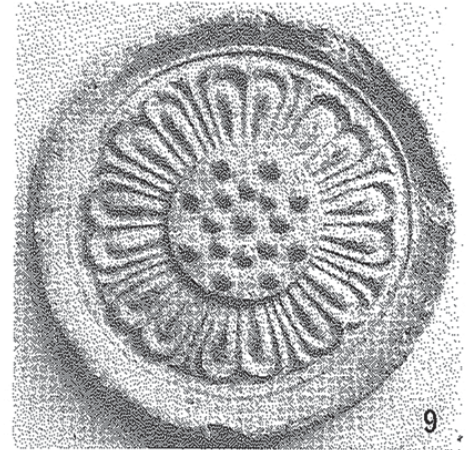
次に同市赤野井町に古瓦を出す遺跡があります。ここでは三重弧文の軒平瓦が見られま



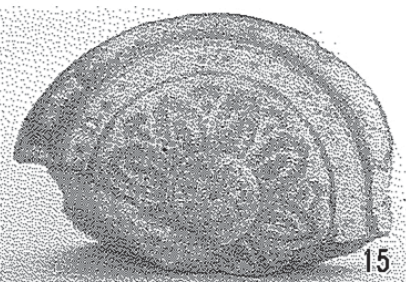
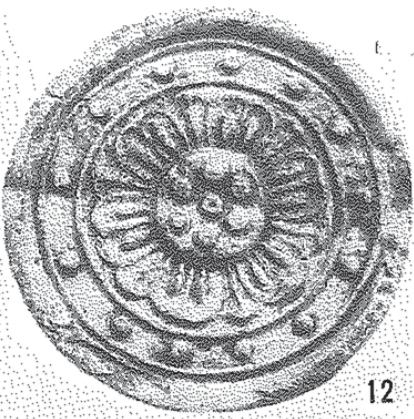
1~7
益須寺跡



8. 赤野井



9、10 狛坂寺
(林 博通氏写真)



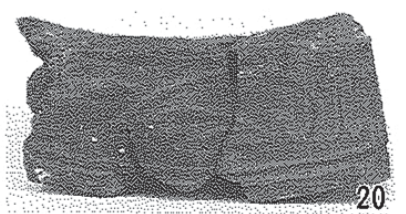
11~15 紫香楽宮跡
12. 県報告書写真
15. 参考資料



16



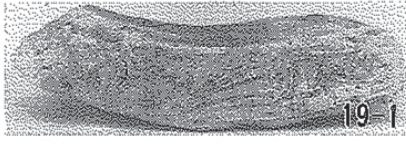
18



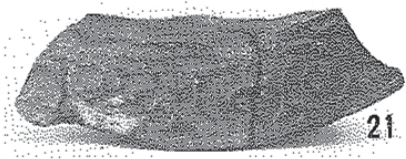
20



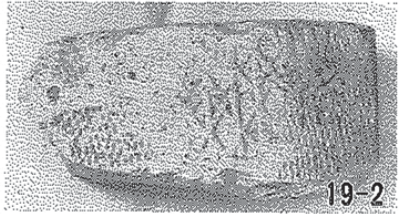
17



19-1

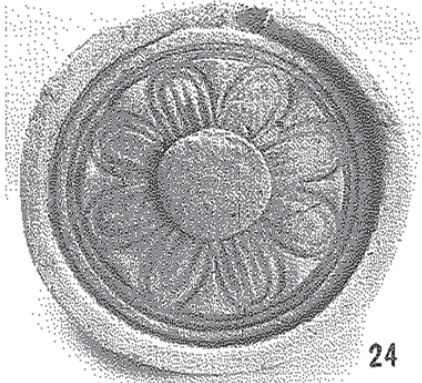


21

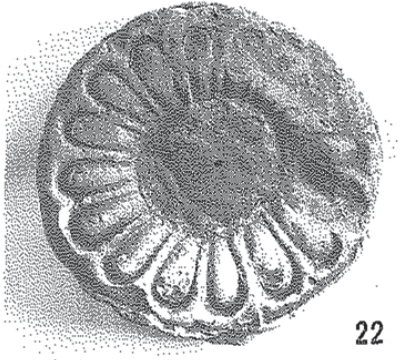


19-2

16~21 福林寺跡
(19-2は19-1の平瓦部凸面)



24

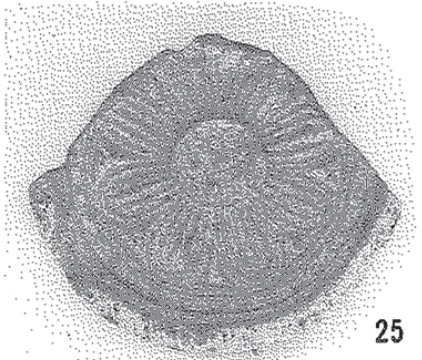


22

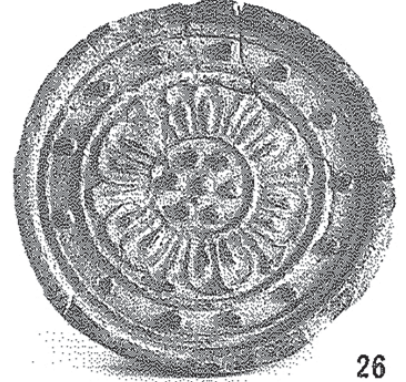


23

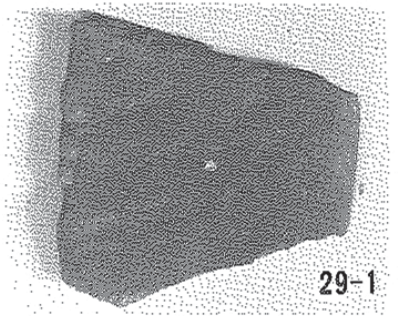
22、23 永原廃寺



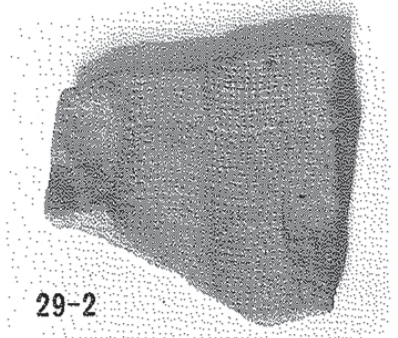
25



26



29-1

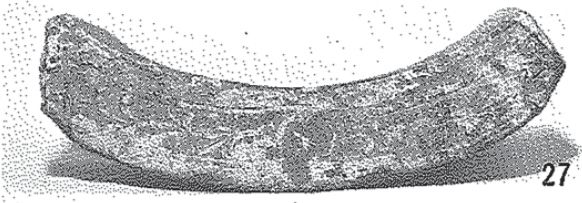


29-2

24、25 六条兵主廃寺



28



27

29 欲賀
(南滋賀出土方
形瓦と同種の
もの)

28 柚 中

26、27 水口蓮華寺

すが、これは弧の断面が扁平なコの字状になるもので、瓦の示す時期は、通常の断面半円形に近い重弧文よりはやや降るのではないのでしょうか。なお、ここで発見された平瓦の小破片の中に、琵琶湖の西岸にある大津市南滋賀出土の極めて特殊な方形瓦に似たものがあることは注意すべきことです。このような方形瓦ではないかと思われるものは、欲賀町でも発見されていますが、赤野井も欲賀も瓦を出す遺跡の性格が不明なのは残念です。また、草津市北大萱町の宝光寺跡出土の古瓦中にもこの種の方形瓦の破片が1片発見されており、南滋賀の対岸にあたる湖南の湖岸地帯に、極めて少量とは言え、この種のものが発見されることは留意すべきことです。しかし残念ながらこのような瓦が出土することに関する正確な意味づけはされておられません。これは今後に残された一つの課題と言えましょう。

栗太郡の古瓦

栗東町では手原^{かみやま}と上砥山^{かみやま}それに磨崖仏^{まがいはつ}で有名な狛坂寺^{かみざか}で古瓦が出土しています。手原の



手原廃寺出土軒丸瓦拓本
 のものは、早く発見されたものが大津市御殿浜の本多氏の所蔵品中にあります。中央に稜線のある素弁8葉のもので、蓮子は1+6、外縁に輻線文が施されています。次に上砥山の樋口瓦窯から出土



樋口瓦窯出土軒平瓦拓本

した法隆寺式の均正忍冬唐草文の軒平瓦破片が3個あります。ここに掲げたものはこの別個体の3片の瓦から拓本で復原したものです。

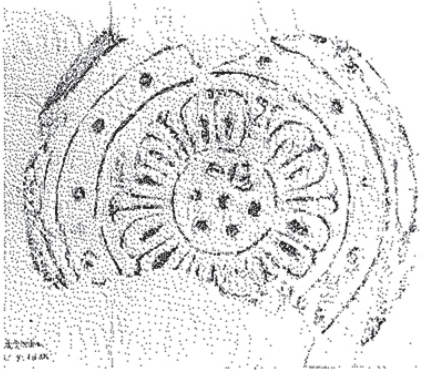
県下出土の均正忍冬唐草文のうち、前述したように野洲町福林寺跡や守山市益須寺跡の出土品は、その瓦当文様がだいぶ崩れておりますが、これは比較的よくまとまり、県下のこの種のものではもっとも良好なものです。この瓦がどこの寺院に使用されたのか、すなわち、県下のこの近くの寺院のものなのか、あるいは遠く奈良の法隆寺などへ運ばれたものなのか、今後の興味ある研究課題と言えます。正確な調査をしていませんので確かに同種かどうかは明言できませんが、奈良の法輪寺ではこの地のものとほぼ同じ瓦当文様のものが出土しています。

狛坂寺出土のものは現在石山寺にあり、これは江戸時代に狛坂寺で採集されたことが記録されています。ところが、狛坂寺については、磨崖仏のある所からやや離れた金勝^{かみかた}よりのところや大津市上田^{かみかた}上の桐生よりの所に寺があったとの説があります。もちろんこの説についてもなおいろいろと調べなければなりません。このような説もあるということで、石山寺所蔵の狛坂寺出土瓦の正確な位置は確言できません。しかしその場所がいずれにしても、古瓦としては狛坂寺出土の記録に従って栗東町の古瓦としてここで述べておきます。いずれも軒丸瓦で複弁8葉のもので、蓮子は一が1+8+8で、他が1+4+8と相違が見られます。共に外縁は素文で、内区と外縁の間に円圈が1本あって、これで区別をしているようです。

甲賀郡の古瓦

甲賀郡には古瓦の出土地が少なく、現在までのところ、信楽町の紫香楽宮跡^{むらさき}と水口町で見られるだけです。

信楽町の紫香楽宮跡は、その礎石の配置が寺院のものであり、そのためこの遺跡を宮跡と見ず、甲賀寺の跡と見る意見もあります。ここでは軒丸瓦が3種、軒平瓦が2種発見されています。さらに軒丸瓦1種がこの地出土と伝えられていますが、これはやや不確かな



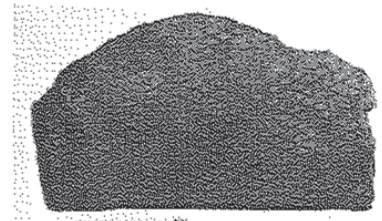
紫香楽宮跡出土軒丸瓦拓本

ものですから、一応参考資料としておきます。軒丸瓦のうち、単弁17葉のものは、中房は小さく、蓮子は1+8で、蓮弁は細くて先端は尖がり、子葉は線的に表現されています。このような内区を24個の小さい珠文が囲んでいます。外縁は斜めに立上がり、斜面には鋸歯文が見られますが、この鋸歯文が無いと思われるものもあるようです。次に、外区にあらわい珠文帯をもつ複弁6葉のものがありますが、これには中房全体が突出しているものと、中房を円で画しているだけのものがあります。蓮子はともに1+6です。なお前述のごとく、以上のものとは趣を異にする単弁8葉のもので当地出土と伝えられる軒丸瓦があります。これは間弁にも子葉を入れたもので、中房は円で画され、弁と中房の間に溝があります。他に例を見ないものですから参考資料としておきます。軒平瓦は均正唐草文で、外区に小さい珠文を密に並べているものがあり、これは単弁17葉の軒丸瓦と対をなすものでしょう。次に中心に楔形のを2個上下において中心飾に変える均正唐草文のものがありますが、これには珠文帯はありません。京都の山城国分寺でこれと同種のものが出土していますが、かの地でこの軒平瓦と対をなすとされている軒丸瓦は信楽では発見されていません。これは山城国分寺では平安時代のものとしています。

この信楽の瓦と同範と思われるものが水口町で見られます。一は平安時代のものと思われる軒平瓦ですが、これ

は信楽から山を越えた水口町の^{まなか}柚中^なで出土しています。今のところ唯1個の破片だけで、出土した遺跡の遺構も不明ですので、出土の事実を述べるにとどめます。次に水口の町の中にある蓮華寺に軒丸瓦と軒平瓦各1個がありますが、この軒丸瓦が信楽の軒丸瓦と同範と思われる。

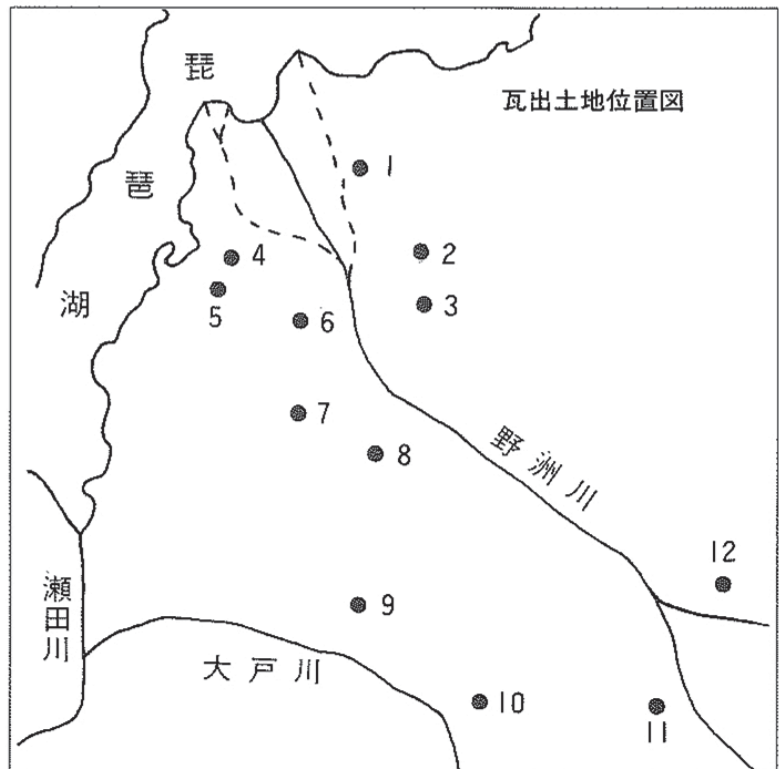
これは複弁6葉で、中房が円圏でつくられているものです。軒平瓦は信楽では



蓮華寺所蔵平瓦

現在までには発見されていない均正唐草文のものです。これは瓦当文様のほりが浅く、その上、各所に磨滅の部分があつて正確にはわかりかねますが、もしこの軒丸瓦と軒平瓦が対をなすのならば、水口にもこの種の瓦を葺いた寺院が存在したと考えられます。なお、同寺所蔵品の中には格子目たたきの平瓦もあり、今後の調査研究がまたれるものです。

(西田 弘氏提供)



1. 六条 2. 永原 3. 福林寺跡 4. 赤野井 5. 欲賀
6. 益須寺跡 7. 手原 8. 樋口瓦窯 9. 狛坂寺跡
10. 紫香楽宮跡 11. 柚中 12. 蓮華寺